

熱帯の有用材 (21)

緒 方 健

アコ (Ako) 学名 *Antiaris* spp. (クワ科)

Antiaris 属にはこれまで 20 近い種が記載されてきたが、それは葉・果実の大きさ、形の少しずつの差異に基づくもので種間の本質的な違いはなく、したがって種の区別がむずかしい。E.J.H. CORNER (1962) の研究によると、種として認められるのは結局 *A. toxicaria* (Rumph. ex Pers.) Lesch., *A. africana* Engl., *A. humbertii* Leandri および *A. madagascariensis* H. Perrier の 4 種で、かつこれらも広義にはすべて同種とみなしうという。

A. toxicaria は熱帯低地の湿潤林に生育する樹木で、分布範囲がきわめて広く、熱帯アフリカから東南アジア一帯、中国南部、ニューギニア (〜フィジー・トンガ) という広大な地域にみられる。CORNER はこれを主に葉と果実の形態から var. *toxicaria* (セイロン〜中国南部〜セレベス), var. *macrophylla* (R. Br.) Corner (フィリピン〜太平洋地域), var. *welwitschii* (Engl.) Corner (熱帯アフリカ) の 3 変種に分けている。この考え方のほかにも、地理的に遠隔している var. *welwitschii* については独立の種 *A. welwitschii* としたりあるいは *A. toxicaria* の亜種 subsp. *welwitschii* として扱われることも多い。一方 *A. africana* は熱帯西〜東アフリカのやや乾燥した地域に生育する樹木であるが、やはり高木となり、木材としては *A. toxicaria* と同様に扱われる。このほかの 2 種 *A. humbertii* および *A. madagascariensis* はマダガスカルのみに分布する低木である。

アコというのはコートディヴォアールの名称で、他に知られている名称としては Oro (ナイジェリア), Cien-chen または Keyn-kyen (ガーナ) などがある。

樹木の形状 (*A. toxicaria* var. *welwitschii*) : 樹高 40~45 m, 直径約 1~1.5 m に達する高木で、葉はふつう一時的に落葉する。樹幹は通直、円筒形で、枝下高は 30 m に及び、鋭い板根が発達する。樹皮は帯緑灰色〜灰色で厚く、表面平滑で、多くの円形の皮目がある。樹皮の切口は淡黄色で硬く、そこから多量の乳白色の液 (ラテックス) が流出してそれはやがて汚褐色に変わる。葉は単葉で、互生する。葉身は長さ 4~13 cm, 幅 3~9 cm の卵形〜広楕円形、革質で、6~12 mm の短い葉柄がある。雌雄異株、ときに同株。雄花序は直径約 6 mm の淡黄緑色の頭状花序で、数個かたまってつく。雄花の花冠は長さ 1.5 mm, 雄ずい 4。雌花は単生する小花で、花柱は 2 裂する。果実は長さ 1.5 cm, 径 1 cm の石果で、橙色〜赤色に熟する。*A. toxicaria* に比し *A. africana* は葉の面がざらざらし、下面の葉脈が著しいのが特徴である。

木材の特徴: 辺心材の区別は不明で、淡黄白色〜淡黄灰色〜帯褐淡黄色を示す。光

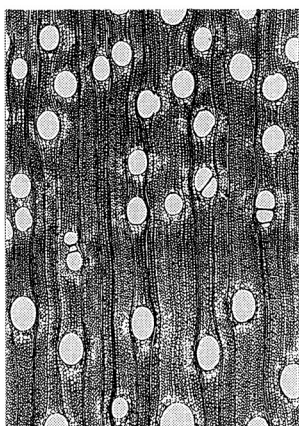


写真-1 *A. toxicaria*
var. welwitschii
木口面 (16×)

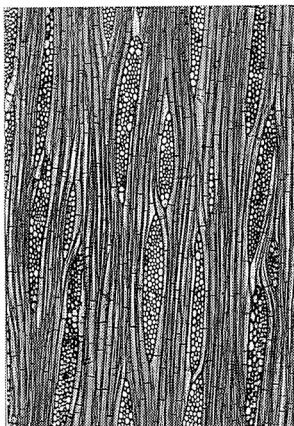


写真-2 同
板目面 (40×)

沢は乏しく、肌目はやや粗～粗。木理は一般に著しく交錯するが、ときにはほぼ通直。気乾比重は0.44(0.27～0.55)。顕微鏡の特徴としては、道管は孤立するものと2～4個複合するものからなり、分布数は6.8(5.0～11.7)/mm²。孤立管

孔の最大径は(160～)220～270 μm。放射組織の最大列は個体により4～7列、最大高は(500～)1000～1300 μm。軸方向柔組織は翼状で、道管の周囲をまるく包み、ルーペではその部分が淡色にみえる。繊維はふつうすべて隔壁繊維で、1繊維に2～数個の隔壁があるが、個体によっては隔壁繊維が部分的にしか現れないことがある。ラテックスの通路となる乳管と呼ばれる組織が一部の放射組織に存在するのが特徴であるが、小さいので注意しないとわかりにくい。同じクワ科の *Artocarpus* (パンノキ属) の材にも乳管があり、一部の樹種は *Antiaris* 属に似て淡色、軽軟であるが、*Artocarpus* には隔壁繊維がないので区別できる。

木材の加工性としては、乾燥はかなり速いが狂いが生じやすい。強度はあまりなく、曲げ加工にも適さない。生材は腐朽菌、青変菌、昆虫に犯されやすく、乾燥材もヒラタキイの被害を受ける。そのため出材を速やかにし、防腐・防虫処理を行う必要がある。薬剤の浸透は容易である。また生材を放置すると悪臭を発するが、乾燥すると臭気はとれる。切削は困難ではないが、交錯木理のある軽軟材のため、工具の刃は鋭利なものでないと毛羽立ちやすい。接着、塗装性には問題なく、単板にも剥きやすい。しかし丸太の中心付近は脆心材であることが多い。用途としては合板を中心に、家具の内部用材、箱材など。

東南アジアでは *A. toxicaria* の幹から出るラテックスを矢毒として用いることで有名で、*toxicaria* の種小名もそれを意味している。かつてヨーロッパではその毒性についてきわめて誇大に伝えられたが、実際はそれほどでもなく、ラテックスが直接血管に入らない限り危険はないようで、木材を扱う上でも問題になったことは聞かない。アフリカや太平洋地域では矢毒としての用途は知られていない。